

## 創設 20 周年にあたって

溝口 理一郎  
(大阪大学産業科学研究所)



本学会が創設された 1986 年はエキスパートシステム全盛のときであり、第五世代コンピュータプロジェクトの熱気と相まって、人工知能技術の応用に対する企業からの熱い期待と新しい論理型言語に基づく推論マシンの開発という学術的興味の両方の相乗効果のお陰で人工知能研究・開発が盛んに行われていた時期であった。今思えば「古き良き時代」であったとの感が強い。しかし、日本経済の停滞とほぼ同時に、エキスパートシステムブームも沈静化して、知識処理全般に対する悲観的な見方が広まっていったことは周知のとおりである。ある意味で、AI 冬の時代ともいえる状況が続いた。

ところが、近年セマンティック Web をはじめとするいわゆる Web インテリジェンスの台頭により、知的処理への期待が高まりつつある。その一つの証左として昨年 12 月に発刊された『人工知能学事典』は「飛ぶように売れ」ており、初版は 1 か月もたたないうちに完売し、さっそく重版がなされた。現在では 3 刷目が検討されていると聞いている。しかも、購買者の多くは非会員が多いとのことである。さらに、10 年弱続いた学会会員数の減少傾向も昨年度は増減なしのゼロとなり、ここにもやはり人工知能の復権の兆しを感じることができる。これは実に喜ばしいことである。

当学会はこれまで歴代の会長、理事、事務局の努力で立派に運営されてきたことには会員諸氏も異論がないことであろう。しかし、学会創設 20 周年を迎え、今後あるべき学会の姿を考えると、改善する余地が残されていることもまた事実である。ここで、この大切な節目にあたり、現在見られる AI 復権の兆しをしっかりと捉え、人工知能研究のさらなる発展のために有効と思われるいくつかの方向について考えてみる。基本精神としては

- (a) 人工知能研究の本質である先端的研究を促進する研究者マインドの問題
- (b) 学会の研究範囲の拡大
- (c) それらを側面から支える学会活動の強化

の三つが重要であろう。(a) の研究者マインドに関して最も重要と考えることが、知能に関する先端的な研究で、研究者個人がおもしろいと思える研究を強力に推進する姿勢である。役に立つか、すぐに解けるのか、流行っているか、などという雑念にとらわれず、とにかくおもしろいことをするという姿勢が人工知能研究には必須である。この姿勢があれば他の問題も自然に解決される。この姿勢を別の角度から言い直すと、簡単なこと、すぐにできそうなことばかりをやるのではなく、(おもしろいが) 難しい問題、すぐには結果が見えない問題を長期的な展望をもって取り組むべきであるともいえよう。

(b) の研究分野の拡大は、異分野交流の勧めということもできる。人工知能は、本質的に隣接分野との交流が必要である。極端な言い方をすれば、知識を扱う知識処理研究は知識が存在するすべてのドメインとの交流が不可欠である。これはある意味で応用を意識した発言に聞こえるかもしれないが、基礎的課題にしても、認知科学、脳科学、インタフェース、ロボティクス、言語学など枚挙にいとまがない。学会活動の拡大という言葉に隠された私の意図に、いわゆる人工知能研究(学界)と産業界の交流の活性化がある。使われる AI 技術、役に立つ AI 技術、それを支える AI 基礎研究などが有機的に連携して産業界に受け入れるようになり、産業界と学界の研究者・技術者が積極的に交流・協力して研究活動が行われることを期待したい。これらのことは論文の評価基準とも大きく関連する。学会としては、どのようなタイプの論文を価値あるものとするかということを示す義務があり、それは長期的には学会活動に大きく影響する。上で述べたことから帰結される多様な価値感に基づいた論文評価基準づくりも重要である。AI フロンティア論文は新しいタイプの研究を促進することを目指して導入されたが、現状は極めて高度な論文のみが対象となると捉えられてしまっており、当初の意図が正しく反映されているとはいえない状況にあるのでさらなる検討が必要と思われる。基礎研究と応用研究との乖離も改善すべき課題であるように思われる。基礎研究者層の拡大も含めて重要であろう。

そして、上述の目標を目に見える形で学会として取り上げて、支援や活性化の活動を行うことは意義深いと思われる。具体的には以下の課題が当面考えられる。

1. 人工知能研究ビジョンの検討も視野に入れた、論文査読基準の斬新な改訂や AI 学会の論文のあり方の模索
2. 会員・企業へのサービスの見直し
3. 会員増、賛助会員増キャンペーン
4. 研究会の見直し
5. 全国大会、研究会などへのシニア研究者の参加促進
6. 学会の国際化、国際的活動の活性化
7. 企業との共同研究の活性化など

これらのことを活性化委員会の活動を中心として地道な活動の積み重ねによって我が国における人工知能研究・開発の活性化につなげていきたい。